

# 親指姫

作・坂本鈴

【登場人物】

佐藤めぐみ

中島邦弘

幸恵

香奈

美紀

有栖川

山田

女子

男子

ナレーター

ランドセルを背負った男子と女子。  
とても緊張感をもって向き合っている。

恋をしている人特有の自意識をもちつつ、とてもとても丁寧に、たどたどしく、話し始める。

女子 あの。

男子 うん。

女子 げんき？

男子 え？

女子 あ、いや、元気、っていうか、なんか、いや（ごまかしてわらう）

男子 げんき。

女子 そっか。よかった。

間。

女子 昨日のメール、だけど。

男子 うん。

女子 返事、もらっていい？

男子 うん。あの、じゃあ、うん。

女子 うん？

男子 まあ、うん。うんってことで。

女子 うん？？

男子 つきあうってことで。

女子 ……ほんと？

男子 うん。

女子 え、ほんとに？

男子 うん。

女子 ……！！

男子 よろしく。

女子 よろしく。

男子 あの。

女子 うん。

男子 メール、ありがとう。あれ、すげえうれしかった。

女子 うん。

二人、手を繋いで去る。チャイムの音。ナレーターが現れる。

NA 夢丘小学校三年二組。学校中で一番カップルの多いそのクラスには、ひみつの噂がありました。

幸恵、香奈、美紀、佐藤、うってかわって女子特有の噂話の楽しさをこめて。わくわくと。

幸恵 楓ちゃん。親指姫にメールしたらしいよ。

香奈 まじで。（同時に）

美紀 まじで。(同時に)

NA それは、あるアドレスにメールをすると、恋のメールの代筆をしてくれるという噂。そしてそのメールの代筆は、どんな恋も成就させるといいます。そしてその代筆屋は、あらゆる恋愛メールを打つ親指をもつ、親指姫と呼ばれていました。

幸恵 美紀ちゃんも親指姫で田上くんに告白しなよ。

美紀 えええええ。

香奈 大丈夫だよ。うまくいくよ。

美紀 じゃあ、じゃあ、わたしが上手くいったら、香奈ちゃんも親指姫ね。

NA 放課後になると女の子達はみんなバラ色の頬をしてその噂と恋の話を楽しみました。

美紀 めぐみちゃんは？

佐藤 え、わ、わたし？わたしは、べつに、そんな、べつに

幸恵 いないの、すきなひと。

佐藤 うん。べつに。だって、わたしなんて、そんな、うん。

香奈 ふうん。

NA しかし、その中で、ひとりそうではない女子がいました。

佐藤めぐみ。彼女はどんな恋の話をしてももじもじとして乗ってこないのです。

(めぐみがもじもじしている)

佐藤 あ、わたし、図書委員の仕事あるから。

佐藤、去る。

美紀 めぐみちゃんってさ、小3にもなって恋も知らないなんて子供だよね。

香奈 そうだよね。

幸恵 てかさ、めぐみちゃんの眼鏡ださくない。

香奈 超ださい。

美紀 本ばかり読んでないで、ちゃんと恋愛したらいいのよね。

三人 ねー。

女子たち、去る。と、そこは図書館。めぐみが居る。

佐藤 わたしはみんながわたしのことをなんて言っているか知っている。確かに、クラスメートからみた私は、本ばかり読んでいる、ださくて暗くてモテない眼鏡。かもしれない。でも、本当のわたしはそうじゃない。だって、わたしがこの図書館で重ねてきた恋愛経験はきつとクラスのだけより多いから。百聞は一見にしかず、というけれど、でも、千聞は？一萬聞は？百万聞なら？嵐が丘、マノンレスコー、痴人の愛、ロミオとジュリエット、肉体の悪魔、シラノドベルジュラック、源氏物語全集。この

図書館の本たちは、いわば私の百万聞。そしてこの百万聞は、クラスメートたちの一見をはるかに超える。それをいま、私は証明してる。わたしのこの親指で。

と、佐藤の携帯の着信音が鳴る。佐藤、携帯を見る。

美紀 田上君に告白したい。

香奈 下町君に、私の気持をつたえたい。

幸恵 わたし、山田君とつきあいたい。

三人 親指姫。願いを叶えて

佐藤、メールを打つ。

NA なんと、その正体こそ、親指姫だったのです。

佐藤 メイクラブ!! (携帯を高く掲げて送信する)

それぞれ、がらりと(大人っぽく)変わって。

美紀 「好きって言葉じゃ足りないくらい、明日も田上君のことが好き。」

香奈 「下町君の分けてくれたシャーペンの芯が、筆箱でかたかた鳴る度に私の心臓も高鳴るの。」

幸恵 「あなたが笑いかけてくれたから七月六日は笑顔記念日。」

着信音。

あわてて携帯を見る、美紀・香奈・幸恵。

美紀・香奈・幸恵 (返事を読む。悶える。声にならない。三人、顔をあげて)

美紀・香奈・幸恵 ……親指姫、まじで、神。

佐藤、にんまりする。

NA しかし、そんな親指姫にも籠絡できない難攻不落の恋のお城がありました。それは、

急に有栖川(ありすがわ)くんが現れる。

有栖川 確かにシュートを決めたのは俺だけど、お前のパスのおかげだろ。あ、佐藤さん、

佐藤 え。

有栖川 (無駄に格好良く)落ちたよ。消しゴム。

佐藤 あ、ありがとう…!

NA それは、サッカー部の有栖川くん。スポーツ万能で女子に優しい有栖川くんは、クラスの女子から絶大な人気を誇っていました。そのため、沢山の女子から、有栖川くと結ばれたいという依頼がきましました。しかし、



美紀 わたしも。

佐藤 あ、いや、あの、でも、香奈ちゃん達彼氏、いなかったっけ。

香奈 あーいるけど、有栖川君クラスの彼氏ができるならやつぱそっちがいいっていうか。

佐藤 え、ん？

香奈 まああと、ぶっちゃけ彼氏とはちよつとマンネリっていうか。

美紀 わかる。なんかさ、もつとときめきたいんだよね。

香奈 そうそう。ときめき大事だよね。

幸恵 やつぱりさ、幾つになってもときめきたいよね。

NA ときめきを求めた女子たちは、新しい代筆屋を使い、有栖川君クラスの男子たちを次々に籠絡してい

ったのでした。(女子達、携帯をいじる)

美紀と香奈と幸恵の携帯がなる。

美紀 竜ヶ崎くん、ゲットだぜ！

香奈 世田谷くん、ゲットだぜ！

幸恵 道明寺君、ゲッ

そこに山田。

山田 ゆーきちちゃん。

女子たち、しらっとする。

幸恵 山田くん、ごめん、わたし好きな人がきたんだ。

山田 え??? そんな、ちよつと待つ・・・

NA ちよつきん

山田、はつとして前を向いて自分の小指を見つめる。

同時に後ろ向きになる幸恵。

NA 恋人たちの小指に繋がった赤い糸をたちまちに断ち切ってしまうその新たな代筆屋は、小指侍と呼ばれるようになるました。

後ろ姿の男と腕を組んで去っていく幸恵。

香奈・美紀・山田 小指侍マジで神。(山田はくやしそうに)

佐藤 ……小指侍って何者？

掲示板 神！

掲示板  
神！  
掲示板  
神！  
掲示板  
神！

謎の神コールの中、キーボードをもった中島が現れる。

中島 一時期はクラスの掲示板で親指姫という代筆メール屋が恋愛の神とか呼ばれていたらしい。が、その称号は僕のものだ。現実の恋愛ゲームでも僕は神として君臨できるということを、僕はいま、証明してる。ゲームで鍛えた、この僕のシミュレーション力で。

ゲーム音楽の中、パソコンの用意をする中島。

NA 新しい代筆屋。その正体は、同じのクラスのギャルゲーマニア、中島邦宏。小三にして、あらゆる恋愛シミュレーションゲームのパターンを熟知し、ギャルゲー界では、「神」の称号を欲しいままにする天才でした。

中島、パソコンに向かう。と、ゲームの音楽。男の子と女の子が現れる。

男子 なんだよ、はなして。

女子 あの、あの、……どうしよう？？

- 1、ずっとあなたが好きでした。
  - 2、お友達からはじめてください。
  - 3、あなたが夢に出てきたの。
- さあ、あなたは、どれにする？？

中島 選択肢、1、2、3、いや、違う、このパターンは隠れ項目、選択肢4！コレだ！送信！！

女子 わたし、あんたと、付き合ってもいいんだからね。

男子 ……！！御願ひします！！

男子と女子、手を繋いで去る。

NA 代筆メールをはじめた中島くんは、その天才的なシミュレーションの選択で、数々の恋を成就させました。

中島 コンプリート！ぼくにかかればこんなもの……何い！？

NA しかし、佐藤さんも黙ってばかりではいられません。

佐藤 小指侍。その程度でこの私に勝ったと思ったら大間違いよ。

中島 こ、これは！

佐藤 チェーンメール！

着信音。男子、携帯を開く。

男子 ん？

NA 『離れてしまったあの子とやりなおしたいあなた。このアドレスにメールをくれたら、あの子の気持ちを取り戻すようなメールを代筆してあげる。なお、このメールは5人以上に転送しないと、あなたは一生彼女ができなくなるよ。親指姫より。』

男子 なにこれ、まじで？？え、やべえ。どうしよう。転送！！（着信音）

声 転送！（着信音）

声 転送！（着信音）

男子達 「親指姫、あの子の気持ちを取り戻してくれ！」

佐藤 私にまかせて！メイククラブ！

男子、山田にくるりと変身。

山田 「君がいなくなってから、僕はたくさんのことに気付いたよ。空が青いこと、雲が白いこと、そして、本当に大事なものは、なくしてからしか気が付かないってことも。あときはわからなかった。でも僕は、君が本気で好きだったんだ。やっとなんか気が付いた。もう遅いってわかっている。僕は過去を生きるけど、君は今を生きている。それでいい。君が幸せならそれでいい。でも、たまにはメールをしてもいいかな。」

幸恵 山田君……。

美紀 田上君。

香奈 下町君。

NA こうして、佐藤さんが紡いだ代筆メールは、元カノたちの心をゆっくりとほだしていったのです。

幸恵 わたし、道明寺君と別れて、山田君とやりなおそうかな。

香奈 えっ？

幸恵 思ったんだ。一瞬のときめきより、大切なものがあるんじゃないかって。山田君は、わたしに言葉を尽くしてくれる。その言葉はね、心の奥までじんわり染みるの。はげしいときめきじゃないけれど、これが愛ってやつなんじゃないのかなって。

香奈 いいと思うよ。実はわたしも、世田谷くんと別れて下町君とヨリをもどしたの。  
幸恵 え。

美紀 そうなんだね。実はわたしも、やっぱわたしのこと本当に分かってくれるのは田上くんしかいないんじゃないかってそう思ってる。

幸恵 やっぱりき、愛だよ。

美紀・香奈 愛だよ。

幸恵、香奈、美紀、去る。

佐藤 ふっふっふ、小指侍。これがわたしの実力よ。

中島 なかなかやるな、親指姫。しかし、それで終わりかい？

佐藤 え。

中島 その程度のことならば、僕も同じことをすればいいだけのこと。

佐藤 ま、まさか。

中島 ハッキング！からの、一斉送信！！

たくさんの着信音。

後ろ姿の人々、携帯を開く。

男子達 ん???

中島 『恋人の心変わりに頭をなやませている君。いまずぐこのアドレスにメールをするんだ。この僕が彼女の気持を取り戻す、とびきりのメールを代筆してやろう。』

男子達の声 「御願いだ、小指侍！彼女の気持をとりもどしてくれ。」

中島 僕に任せろ。コンプリートだ。必殺、「デコメ地獄！」

何かデコメの表現。それに打ち抜かれる女子たち。

女子達 ああん！（喘ぐ）

佐藤 これは！！

NA 中島君の代筆メールは、再び彼女たちの心を奪い去りました。

幸恵 でもやっぱり、ときめかせてくれるのは道明寺君なんだよね！

美紀 わたしもやっぱり竜ヶ崎くんのが忘れられない。

香奈 やっぱりさ、いくつになってもときめきたいよね。

佐藤 や、やるじゃない。小指侍。これで私たちの立場は対等。どっちが真の代筆メール屋か、ここではつきりさせましょう。

中島 さあつて、ここからが本番だ。親指姫、覚悟するんだな。いくぜ。

佐藤 いくわよ。

NA それを皮切りに、二人の代筆メールの争いはどんどん激しくなっていました。

佐藤 「瞳を閉じればまぶたに浮かぶ君の笑顔、目を閉じててもまぶしくて。」

NA どきゅん。（幸恵、喘ぐ）

中島 「俺、本気になってもいいかな。」

NA ずきゅん。（美紀、喘ぐ）

佐藤 「野に咲く花からも君を想って切なくて石ころを蹴とばす通学路」

N A ばきゅん。(香奈、喘ぐ)  
中島 「言わせるなよ。……だから、好きだってことだよ。」  
N A ずばしゅっ(三人喘ぐ)

ダメージをうける女子達。はあはあする。

N A 二人とも、一步もひきません。

中島 さすがだな、親指姫

佐藤 なかなかやるわね、小指侍。

中島 だが、切り札をもってるのは僕の方だぜ。

佐藤 今楽にしてあげるわ。「この胸の鼓動は君と同じ……」

N A しかし

女子達 も、もうだめ。助けて、小指侍!!

佐藤 ……なんですって？

中島 僕にまかせろ、コンプリートだ！君たちの気持ちは、僕が代筆してあげよう。

佐藤 クラスの女子たちが、また小指侍に代筆をたのみはじめている??? 一体なぜ。

幸恵 二人のメールと同じくらい素敵なメールを返したい。

香奈 でも返せない。

美紀 わたし、こんなんじや嫌われちゃうよ！

中島 気付かなかったのかい、親指姫、彼女たちにとって、僕たちの強靱な言葉の刃に返信を書くのがどれだけプレッシャーになるかなんて、少し考えればわかること。そんなとき、代筆を頼むのは至極当然。そして、彼女たちはみんなこの僕のユーザーなんだよ！さあ親指姫、これが、どういうことかわかるかな。

佐藤 しかも、それじゃあまさか

中島 これからじっくりおしえてあげよう。

佐藤 まさか自分の書いた代筆メールに自分で返信してるってこと!?

中島 「ゆき、さっきの算数、うとうとしてたな。どうした？寝不足？」

「大丈夫だよ。昨日ちよつと、道明寺君のことかかんがえてたら、なんだかねむれなくなっちゃって。」

「一緒だね。俺も、ゆきのことをかかんがえて寝不足なんだ。夢の中でもあえるかな、ってさ」

「びっくりだにゃん。おんなじだぴょん。」

「それじゃあ次の国語の時間は夢の中で待ち合わせよう。」

「同じ夢、みようね。約束だよ。」

その言葉に操られるようにだんだんと中島にちかづく彼女たち。  
それをみながら、焦る佐藤。

NA 中島くんの切り札に、佐藤さんは、はじめて目の前の勝算がしゅわしゅわとしぼんでいくのをかんじました。でも、それでも、まけるわけにはいきません。佐藤さんは一生懸命彼女達のところをつかめるような言葉を考えました。

佐藤 「赤い糸が絡まって胸が苦しくて狂おしい。君は僕の太陽だ。月だ。世界だ。僕の全てだ。明日君が死ぬなら、僕は今日死ぬ、地球最後の日は君に会いたい！」

中島 「……ふうん。そう。」

カキーン、という音。

佐藤 くうっ。

NA とはいえ、佐藤さんがどんなに渾身の力を込めて書いても、中島くんの返信で、すぐに一蹴されてしまった。

佐藤 思い出せ、思い出せ私。嵐が丘、マノンレスコー、痴人の愛、わたしの体験した百万圓が、きっと答えをおしえてくれる。攻撃しても攻撃してもとどかない、そんな恋の成就の定石、それは、あ！

NA 佐藤さんはあることわざをおもいだしました。押ししてもだめなら

佐藤 引いてみる。

ナレーターと佐藤、目を合わせてうなづく。

佐藤 ゆっちゃん。なんか、かわったね。

幸恵 え？

佐藤 昔の君がなつかしいな。

幸恵 昔？

佐藤 あの頃の君の文学的な言葉に、ぼくの心は打ち抜かれたんだ。

幸恵 昔って、親指姫をつかってた頃？

佐藤 でも、君は変わってしまった。僕の好きだった君は、もう、もう過去の人かもしれない。

幸恵 ちがうの、あの、

佐藤 ぼくは、もう、

幸恵 助けて、親指姫！！

佐藤 私にまかせて！

NA そして、その作戦が功を奏し、佐藤さんも女の子たちの代筆権をゲットすることに成功しました。

中島 なるほどな。そうきたか。

NA そして女子たちは、親指姫と小指侍を男子によって使い分けるようになったのです。

幸恵 道明寺くんには小指侍、山田君には親指姫。  
美紀 竜ヶ崎くんには小指侍、田上くんには親指姫。  
香奈 世田谷くんには小指侍、下町君には親指姫。

佐藤 小指侍、まだ勝負はここからよ。  
中島 受けて立とう。コンプリートだ！  
佐藤 メイククラブ！

NA 気がつくつと、二人の死闘はクラス中の恋愛を牛耳っていました。

佐藤 「君が笑うと世界が七色に輝くようだ。」

NA ずきゅん （幸恵、あえぐ）

中島 「おまえの瞳はレインボー。」

NA ずきゅん （美紀、あえぐ）

佐藤 「君の小指の赤い糸に絡め取られて僕は君のマリオネット。」

NA ずきゅん （香奈、あえぐ）

中島 「ビーマイベイビー」

NA ずきゅん！！（三人、絶頂）

NA どんどん激しくなっていくラブメールに、クラスメートたちは容赦なく打ち抜かれていきました。

三人、ばたりと倒れる。

と、ゆるゆる起き上がりながら、うってかわってだるそうに。

幸恵 でもさ、メールはいいんだけどさ、会ってるときは別にそうでもないんだよねー。

香奈 そうなんだよね。

美紀 一緒に帰ったりしててもさ、も、全然楽しくないんだけど。

幸恵 でも昨日も家に帰ったら「さあ、今から君を思って眠れない夜がやってくる。」ってメールが来て、

そういうのはやっぱ、超うれしんだよね。

美紀 ちよっとちがうんだけど、あたしも昨日「君は僕の眠りを殺した」ってメールきて…

香奈 それ、わたしも昨日似たような…

女子達、微妙な間。

香奈 なんかさ、あれじゃない？ちよつとあれじゃない？まえから思っではいたけどさ、なんか色々かぶり  
すぎじゃない？

美紀 そう、だよな。

幸恵 同じ人がメールかいてるみたいだね。

香奈 相手も、代筆使ってる、とか。

携帯の着信。

小指侍と親指姫、携帯をとる。

メールをみて、驚く。

佐藤・中島 ……え???

美紀 え、だってそしたら、え?? 私たちも代筆で、男子も代筆使って、みたいなの?

香奈 うん。

美紀 じゃあもう全部、全員代筆ってそういうこと?

香奈 きいてみる?

NA いつも代筆ありがとう。今日は代筆のおねがいじゃなくて、ききたいことがあってメールをしました。

もしかして、あなたは彼のメールの代筆もしているの?

香奈 でも、もしそうだったらどうする。

幸恵 わたしは、すきになるかもしれない。

美紀 え。

幸恵 彼よりも、メールを書いてたひとのことを、好きになるかもしれない。

NA だとしたら、あなたがだれなのか知りたい。

幸恵 毎日何度も読み返したメールを書いたのが、もし、別の人だったら、私、そのひとを好きになってしまおうと思う。

NA わたし、あなたが好きかもしれない。毎日何度も読み返したあのメールをあなたが書いていたのだとしたら、彼よりあなたを好きかもしれない。だから、もし、もしもそうだとしたら、放課後、屋上にきてください。待っています。

佐藤、中島、しばし携帯をみつめる。

NA それは、依頼者からのメールでした。親指姫は、罪悪感にかられながらも携帯を閉じました。そして、小指侍も…

そこは屋上。中島と、幸恵、香奈、美紀、佐藤がいる。

中島 ぼくが代筆しました! (NA、驚く)

幸・香・美 えー!!!

幸恵 まじで? 中島?? ええええ?

中島 え、え?

香奈 中島はない。中島はないわ。

美紀 いや、よりによって、あーもー。まじで。まじで?

中島 いや、でも(ぼくのことを好きだって……)

幸恵 っつか私、中島のメール読み返してたとかホント死にそう。

幸恵、美紀、香奈、去る。佐藤、中島、目があう。佐藤、去る。

中島 あ、

NA 代筆屋が中島くんだったという事実は、たちまちクラスに広まりました。

中島の背後から有栖川が現れる。

有栖川 中島。

中島 (驚いて) うわ！え、あ、有栖川く

有栖川 おまえさ、メールの代筆やってたってほんと？

中島 え、あ、いや。(へらっとして)

有栖川 ……。

中島 ……うん。

有栖川 俺の、彼女のメールも？

中島 うん。

有栖川 へえ。

中島 へへ(へらへらと笑う)

有栖川 ……調子のってんじゃねーぞ。

中島 ……！

有栖川 キモオタ。

有栖川、去る。

茫然とする、中島。

声 きもおた。

声 きもおた。

声 きもおた。

声 きもおた。

中島 ぼくは、ぼくは自分が他の人からどういわれているか知っていた。確かに、クラスメートからみたら、

確かにぼくは、暗くてださくて、キモいオタク、かもしれない。でもそれは、本当の僕じゃないとおもっていた。ゲームでの僕の恋愛経験はきっとだれより多かったから。でも、でも。

声 なんか、親指姫もメール無視なんだけど。

声 むかつくよね。どうせブスか不細工のくせに。

中島 親指姫、親指姫は今、一体どんな気持ちでいるんだろう。

佐藤 小指侍は中島くんだった、ということが判明したその日から、怖くなって、代筆の依頼は全部無視した。そのうちにメールが途絶えて、私はもう親指姫じゃなくなった。中島君とはあれから一言もしやべらなかつた。でも、教室で見る中島くんの丸い背中が、どんどん丸くなって、その背中は

なんだかわたしの背中のようなそんな気もして。

中島くん。中島くんは、その丸い背中の内側でどんな気持でいるんだろう。

NA

中島くんは親指姫に、佐藤さんは中島君にそれぞれ思いをはせました。そして二人はお互いにメールを書きたい気持になりました。

佐藤、携帯に親指をかける。中島、PCに向かう。しかし、

中島

親指姫へ。

佐藤

中島くんへ。わたしたちは虚構のつばめ・いやいや、

中島

選択肢、1、2、3、4、

佐藤

あなたの言葉は甘いしらべ。わたしの…あれ？

NA

でも、書いても書いても、自分の言葉じゃない気がして途中で消してしまうのです。

クラスメイトたち、メールを打とうとする。しかし、途中で断念してしまう。

佐々木

今日は、きみと、恋のABCを…：いやいや、(消去)

香奈

ねえ、わたしの愛しいあなた、神の怒りに…：あれ？(消去)

NA

そして、代筆がつかえなくなったクラスメイトたちもまた、今までのように恋のメールをうつことはできませんでした。

中島

どの番号も違う気がする。

佐藤

誰かの言葉にのせないと、全然親指が動かない。

中島

いくらパソコンを開いてもどんなメールをうてばいいのか分からない。

佐藤

私の経験になるはずだった百万聞は、いつのまに、誰かの言葉に化けたんだろう。

中島

何かをいいたいはずなのに、それが全然言葉にならない。

佐藤

誰かに言葉を貸してるつもりで、わたしはずっと誰かに言葉を借りていたのかもしれない。

NA

それから次第にクラス中の恋愛ははらりはらりと地面におちて、気が付くと、もうだれも、放課後に恋の話をするひとはいなくなっていました。

クラスメイト達、携帯を閉じて、去る。中島も去る。

ぼつりと残る、佐藤。

NA

そんなある日、佐藤さんに一通のメールが届きました。

携帯の着信。

佐藤、携帯を見る。

女子

親指姫へ。わたしのきもちをつたえてください。

N A それは、久しぶりの代筆依頼のメール。そこには自分でメールを書けなくて、恋を失ってしまった女子の気持ちが書いてありました。

女子 代筆はやめようって思ってたけど、でも、なんだか上手に自分でメールは書けなくて、相手からもメールがなくなつて、これじゃあダメだつてわかつてる。わかつてるけど、親指姫、これで最後、最後にするから、私の気持ちをどうか彼につたえてください。

N A 佐藤さんは、なんだかもやとした気持ちになりました。そして久しぶりに、とても久しぶりに、代筆メールをかいてみました。

女子 元気ですか。私は全然元気じゃないよ。あなたとメールのやりとりをしていないから。

N A すると、いままでずっと、まとまらなかった言葉たちが、自分の気持ちとないまぜになって溢れ出ました。

女子 毎日毎日、あの時のやりとりを思い出す。でも、思えばわたしとあなたは直接メールをしたことはなかったんだね。

N A 返事はすぐに届きました。

男子 久しぶり。僕もずっと元気じゃなかった。君と、メールのやりとりをしていたことをいつも思いだしていた。直接のメールをしてないメール。

佐藤・女子 あれから、直接あなたにメールがしたくて、何度もあなたにメールを書いた。でも怖くて全部消した。どの言葉も、私の気持ちじゃない気がして。人の言葉を使っていたら、自分の気持ちがわからなくなつた。

中島・男子 僕は僕じゃないもので僕を塗り固めてしまった。だから、それがはがれ落ちてしまった後、どうしていいのかわからなくなつてしまった。

N A 佐藤さんは、依頼者の後ろに小指侍がいるようなそんな気がしました。

男子が喋っていたのが、だんだんと中島が喋るようになっていく。

中島 ただ、君にメールを打ちたくなつた。はがれ落ちたそのまま僕で、君と話が出なかった。でもメールは送れなかった。僕は勇気がなかったから。

女子が喋っていたのが、だんだん佐藤が喋るようになっていく。  
男子と女子を挟んで、見つめ合う佐藤と中島。

佐藤 わたしも勇気がなかった。もつとずっと、強いつもりでいたはずなのに、気が付けば、誰かの後ろに

中島 隠れてた。傷付かないように隠れてた。でも、わたし、かわりたい。君と向き合うことができたなら、僕は僕に向き合えるだろうか。

佐藤 あなたに私をさらせたら、私は少し、強くなれるんじゃないかってそう思う。きみを知りたい。君と一緒に、僕を知りたい。

佐藤 あなたとちゃんと向き合いたい。あなたと一緒に私自身と向き合いたい。

あいたい。

中島 あいたい。

佐藤 ……あなたが、告白をした、あの場所で待ってます。

男子と女子、いなくなる。佐藤、去る。

中島 告白……？ あ！！

ナレーター、本を閉じて去る。

そこは屋上。佐藤と中島、会う。

いままで大人のような雄弁さが嘘のように子ども顔になる。その無力さで。

佐藤 あの。

中島 うん。

佐藤 げんき？

中島 え？

佐藤 あ、いや、元気、っていうか、なんか、いや（ごまかしてわらう）

中島 げんき。

佐藤 そっか。

間。

中島・佐藤 あの

ひととおりにんぱって譲り合う。

中島 あの、メール、ありがとう。すげえ、うれしかった。

佐藤 うん

終幕